

山階芳麿賞について

山階鳥類研究所は財団創立 50 周年記念行事（平成 4 年 7 月）の一環としてこの賞を設けることにした。この賞は日本の鳥学及び保護に寄与された、財団法人山階鳥類研究所の初代理事長・故山階芳麿博士の功績を記念して、「山階芳麿賞」と名付けた。

山階芳麿賞は、国内におけるデラクール賞に準ずるものとして、鳥学及び鳥類保護に顕著な功績のあったものを讃え、わが国の鳥学の発展並びに鳥類保護の振興に寄与することを目的としている。現在わが国には、鳥学研究者を対象とした賞がないため、実質的にはこの山階芳麿賞が国内におけるデラクール賞にあたる。

受賞者は「山階芳麿賞」選考委員会で選考される。受賞者は、隔年度 1 名とし、選考の結果該当者がいない場合には、その年度の表彰は行わない。選考委員会は山階鳥類研究所所長が委員長を務め、日本鳥学会会長、山階鳥類研究所研究部長、山階鳥類研究所理事及び評議員（7 名以内）、学識経験者（5 名以内）で構成される。受賞者の選考は、出席選考委員の過半数をもって決定する。

受賞者には、山階鳥類研究所総裁・秋篠宮文仁親王が表彰する予定で、表彰状と山階芳麿賞記念メダルを贈呈する。記念メダルのデザインは、表・山階芳麿博士肖像、裏・ヤンバルクイナのレリーフとなっており、受賞年と受賞者氏名が刻印される。ヤンバルクイナは沖縄県で発見され、昭和 56 年に山階芳麿博士らが新種として発表した山階鳥類研究所のシンボルの一つ。なお、平成 15 年度からはさらに副賞として「朝日新聞社賞」（賞金 50 万円と盾）が贈られている。

< 歴代受賞者 >

- 第 1 回（平成 4 年度）信州大学名誉教授・羽田健三博士
- 第 2 回（平成 5 年度）山階鳥類研究所顧問・松山資郎氏
- 第 3 回（平成 6 年度）山梨大学名誉教授・中村司博士
- 第 4 回（平成 7 年度）山階鳥類研究所所長・黒田長久博士（現・山階鳥類研究所名誉所長）
- 第 5 回（平成 8 年度）上越教育大学名誉教授・中村登流博士
- 第 6 回（平成 9 年度）専修大学北海道短期大学教授・正富宏之博士
- 第 7 回（平成 10 年度）東京大学大学院教授・樋口広芳博士
- 第 8 回（平成 11 年度）京都大学大学院教授・山岸哲博士（現・山階鳥類研究所所長）
- 第 9 回（平成 12 年度）帯広畜産大学教授・藤巻裕蔵博士
- 第 10 回（平成 13 年度）北海道大学大学院教授・小城春雄博士
- 第 11 回（平成 14 年度）信州大学教育学部教授・中村浩志博士
- 第 12 回（平成 15 年度）早稲田大学名誉教授・石居進博士

山階芳麿博士の業績

山階博士（1900～1989）は幼い頃から鳥に興味を持っていた。帝国大学（現東京大学）理学部動物学科専科に入学、動物学の基礎的な学問を学んだ。動物学専科を昭和 6 年に修了、昭和 7 年には山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、その後鳥類の研究に没頭し、積極的にアジア・太平洋地域の鳥類標本収集に努めた。昭和 14 年から、北海道帝国大学（現北海道大学）の小熊捍教授の指導を受け、鳥類の雑種の不妊性の研究を行った。昭和 17 年「鳥類雑種の不妊性に関する論文」で同大学から理学博士号を受ける。その後、鳥類の染色体系の研究に取組み、鳥類分類に染色体を用いて分類する方法を導入し、国の内外から高く評価される。昭和 24 年には「細胞学に基づく動物の分類法」を著し、翌 25 年、日本遺伝学賞を受賞した。また、当時戦後のタンパク質不足から、文部省から「ニワトリの増殖」について研究委託を受け、多産で肉質がよいニワトリの品種改良にも取組んだ。ほか、バリケンとアヒルの雑種ドバンの増殖研究にも力を入れた。その後、研究だけでなく、鳥類保護にも熱意を注いだ。日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任した。

同博士の主な著書としては、昭和 8 年に「日本の鳥類と其生態Ⅰ」、昭和 16 年に「日本の鳥類と其生態Ⅱ」を出版。昭和 61 年には世界の全鳥類に和名を付けた「世界鳥類和名辞典」を出版した。

昭和 52 年には、鳥学の世界のノーベル賞とも言われる、ジャン・デラクール賞を受賞。翌 53 年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章が贈られた。

ジャン・デラクール賞

鳥学者のノーベル賞と呼ばれ、鳥学の世界では最高の勲章である。この賞は 1967 年（昭和 42 年）国際鳥類保護会議（I C B P）が設けたもので、Ornithology（鳥学）、Conservation（保護）、Aviculture（保護のための増殖）の三つの分野において、すべてに世界的な貢献をした人に授与される。この賞はキジ類や水鳥の研究で世界的に知られ、国際鳥類保護会議の第 2 代目の会長を 20 年も務め、その他いくつかの国際団体の会長も務めた仏人、ジャン・デラクール博士（1890～1985）の業績を讃えて、このように名付けられた。基金は、デラクール博士が自ら拠出し、それを国際鳥類保護会議の米国支部が管理し、同支部に設けられている選考委員会において、満場一致で推薦されることが条件となっている。

第 1 回の受賞者は 1968 年にノーベル賞受賞者でもあるオーストリアのコンラート・ローレンツ博士、第 2 回の受賞者は 1970 年にイギリスのフィリス・バークレイスミス女史、第 3 回の受賞者はベルギーのレオン・リペンス伯爵、そして、第 4 回の受賞者として、1977 年日本の山階芳麿博士が選ばれた。以後、受賞者は今日まで出ていないことから、この賞の選考条件が厳しいことがうかがえる。

環境省記者発表資料（平成 16 年 5 月 25 日）

山階芳麿賞 歴代受賞者

回数	氏名	所属・職名	受賞年月日	備考
第一回 (選考理由)	羽田健三	信州大学名誉教授 独創的な雁鴨（ガンカモ）科鳥類の群集生態学研究 鳥類生態学を志す後進の育成	平成 4 年 7 月 3 日	H 6 年 11 月逝去
第二回 (選考理由)	松山資郎	山階鳥類研究所顧問 元農林省主任研究官、元山階鳥類研究所事務局長・資料室長 応用鳥学・野生鳥類の保護管理に関する基礎的研究 野生鳥類保護管理に関する後進の指導	平成 5 年 7 月 5 日	H 12 年 8 月逝去
第三回 (選考理由)	中村 司	山梨大学名誉教授 鳥類の渡りに関する生理学的研究 地元における鳥類保護・自然保護の推進	平成 6 年 7 月 5 日	
第四回 (選考理由)	黒田長久	山階鳥研所長 鳥類の形態・生態に関する幅広い分野の研究 現代鳥学界における礎石的存在	平成 7 年 7 月 5 日	現・山階鳥研名誉所長
第五回 (選考理由)	中村登流	上越教育大学名誉教授 鳥類社会学に関する長年の研究 鳥類社会学を志す後進の指導	平成 8 年 7 月 3 日	
第六回 (選考理由)	正富宏之	専修大学北海道短期大学教授 我が国の動物行動学の発展に貢献 長年タンチョウの生態研究と保護に尽力	平成 9 年 9 月 9 日	
第七回 (選考理由)	樋口広芳	東京大学大学院教授 鳥類生態学に生物進化の多次元性を取り入れた研究 渡り鳥の人工衛星追跡調査手法を確立し鳥類保護に貢献	平成 10 年 7 月 4 日	
第八回 (選考理由)	山岸 哲	京都大学大学院教授 鳥類の社会生態学的研究の推進と オオハシモズ科の適応放散の研究と保護に貢献	平成 11 年 7 月 3 日	現・山階鳥研所長

環境省記者発表資料（平成 16 年 5 月 25 日）

回数	氏名	所属・職名	受賞年月日	備考
第九回 （選考理由）	藤巻裕蔵	帯広畜産大学教授 エゾライチョウの野外研究を基にその飼育や保護管理に貢献 日本とロシアの鳥類研究者との交流を推進	平成 12 年 6 月 17 日	
第十回 （選考理由）	小城春雄	北海道大学大学院教授 北太平洋における海鳥の生態解明とその研究成果を基にした 海鳥保護の推進および後進の指導に尽力	平成 13 年 6 月 1 日	
第十一回 （選考理由）	中村浩志	信州大学教授 カッコウの宿主の共進化特に宿主転換と宿主に対応する托卵系統の存在を明らか にし後進の指導に尽力	平成 14 年 6 月 7 日	
第十二回 （選考理由）	石居 進	早稲田大学名誉教授 鳥類の生殖腺刺激ホルモンの解明に取り組み、絶滅危惧種の繁殖促進に貢献した 後進の指導に尽力	平成 15 年 9 月 23 日	

受賞者の紹介



(学部・学科) 岩手県立大学 総合政策学部 総合政策学科
(氏名・フリガナ) 由井 正敏 ・ユイ マサトシ
(生年月日) 1943年12月1日 東京都吉祥寺生れ
(職名) 教授
(研究室の連絡先) 電話 019(694)2738
FAX 019(694)2739
電子メール moyui@iwate-pu.ac.jp

- (学歴) 1966年3月 東京大学農学部林学科卒業
(略歴) 1966年4月 農林省林業試験場鳥獣第2研究室研究員
1970年4月 農林省林業試験場東北支場鳥獣研究室研究員
1974年9月 同 鳥獣研究室室長
1990年2月 森林総合研究所東北支所保護部長
1998年4月～ 岩手県立大学総合政策学部教授
(学位) 農学博士 1979年11月 東京大学
「森林性鳥類のラインセンサス法に関する研究」
(主な専門分野) 森林鳥類生態学、野生動物管理学
(研究課題) ・イヌワシ等猛禽類の生態と保護
・森林性鳥獣の生態と保護管理
・野生動物と開発との共存に関する研究
(主な担当科目) ・環境生態学
・地域生態系保全論
・環境科学概論
(研究業績)
・森林性鳥類の群集構造解析 I～IV (IV のみ共著) (山階鳥類研究所研究報告) 1976年～1983年
・森林原野性鳥類のラインセンサス法の研究 I～VIII (山階鳥類研究所研究報告) 1978年～1980年
・ブナ林の自然環境と保全 (共著) (ソフトサイエンス社) 1991年
・白神山地世界自然遺産地域の森林生態系保全のためのモニタリング手法の確立と外縁部の森林利用との調和を図るための森林管理法に関する研究 (共著) (環境省) 2004年
・イヌワシの主食であるノウサギ増殖のための列状間伐の効果 (共著) (第114回日本林学会大会学術講演集) 2003年
・動物の群集の個体群の調査法 (鳥類) 「地球環境調査計測事典第1巻陸域編」 (フジ・テクノシステム) 2002年
・林道と林内でバードウォッチングの効率に違いはあるのか? (共著) (東北森林科学会誌 7-1) 2002年
・森林・林業百科事典 (共著) (日本林業技術協会) 2001年

- ・小規模疎開地の造成がイヌワシの採餌行動頻度に与える効果(共著)(岩手県立大学「総合政策」学会誌3-1)2001年
- ・国有林における自然保護施策の展開に向けて(環境と公害29-4)2000年
- ・「森林における野生生物の保護管理」(共著)(日本林業調査会)1999年

(学会・社会活動)

- ・日本林学会(評議員、2002年～)
- ・野生生物保護学会(理事、編集委員1996年～)
- ・日本鳥類保護連盟岩手県支部長(1999年～)
- ・環境省猛禽類保護方策分科会(委員及び座長1994年～)
- ・岩手県森林審議会(委員、2002年～)
- ・岩手県文化財保護審議会(委員、2000年～)
- ・岩手県環境審議会(委員、2002年～)
- ・国土交通省東北地方整備局事業評価監視委員会(委員、2003年～)
- ・岩手県大規模事業評価専門委員会(委員、2003年～)

(過去1年間の業績の概要)

この1年間の研究内容は、北上高地のイヌワシの繁殖成績と採餌行動に適した植生面積の相関解析結果の投稿、カラムツ林への巣箱架設により増殖したシジュウカラ類による害虫捕食が生態系の安定性に及ぼす効果分析の継続、白神山地の繁殖鳥類群集及びイヌワシのモニタリング手法の最終報告書作成など。この1年の教育業績は卒論5名、修論3名、博論1名、研究生1名の指導。社会貢献活動は数十に及ぶ国、自治体、公団等の委員会における事業の評価や助言指導、条例やマニュアル、指導書の作成。

(メッセージ)

持続的な農林生産と生物多様性保護の調和を目指して、イヌワシ、クマゲラ、食虫性鳥類などの研究を行っている。

由井正敏氏へ山階芳麿賞の贈賞理由

山階芳麿賞審査委員会委員長 山岸 哲

岩手県立大学教授、由井正敏氏はこれまで一貫して、森林と鳥類の関係について研究されてきました。氏はまず、森林にすむ鳥類の個体数推定法（ラインセンサス法）を確立されました。センサスで得られた結果を調査時間、天候、調査者などの変数にもとづいて標準化するこの方法は、氏の研究の出発点であると同時に、氏のその後の詳細な森林性鳥類研究の強力な武器にもなりました。

由井氏は引き続き、森林の種類や構造と鳥類の多様性との関係の解明に取り組みました。日本全国の色々なタイプの森林を調査され、それぞれの森林にすむ鳥類の種数や個体数、種構成が森林の主要構成樹種、樹齢、林内の垂直構造、モザイク状態の違いなどによって、どう影響を受けているかを解明されました。この研究結果は、異なる森林に異なる鳥類の多様性が見られることを単に示しただけでなく、異なる森林施業を実施している造林地での鳥類多様性の変化のあり方をも明らかにしました。後者の側面では特に、広葉樹をふくむ複数の樹種からなる森林施業が多様な鳥類群集を生み出すことを明らかにされ、この成果はその後、豊かな生物多様性をも育む森林施業を考えさせることに大きく貢献しました。

一方、由井氏は、森林生態系が健全に機能する上での鳥類の役割についても研究されました。キツツキを中心として、色々な鳥類の巣を対象に、親鳥がヒナに運んでくる食物の種類や量を丹念に調査され、同時に林内で発生するマダラカミキリやマイマイガなどの昆虫の量を推定されて、通常時には、鳥類が害虫の量のあるレベルにまで抑えていることを明らかにされました。この研究は、鳥類が森林の健全性を維持していることを示した数少ない例であるといえます。

以上のように、由井正敏氏の研究は基礎、応用両面から森林と鳥類の関係を広く、深く追求されたものであり、鳥類学を大きく発展させることに貢献されました。そこで、本委員会は、鳥類の基礎、応用両面からなる研究を重視する山階芳麿賞を贈賞するのに、誠にふさわしいものであると判断いたしました。